

まちづくり（自主防災）講演会『地域の自主防災組織の必要性について』

平成22年8月30日（月）19:00～20:30

釜戸公民館 多目的ホール

講師：レスキューストックヤード代表理事 栗田 暢之 氏

参加者数：150人

内訳

（人）

区長会	まちづくり 推進協議会	議員	一般職員	担当職員	合計
107	15	3	15	10	150



講演 演題 『地域の自主防災組織の必要性について』

みなさん、こんばんは。私は、紹介のあったように単なるボランティアから阪神大震災に関わり、これまでに30ヶ所ほどの様々な災害現場に関わってきた。それには、いろんな場面があるが、10年前の東海豪雨水害でも大変な被害があった。

名古屋の水害では、内水氾濫と外水氾濫があった。外水氾濫とは、堤防が決壊して街中に泥水が溢れる状況であり、内水氾濫とは、大雨などで排水しきれなかった水が行き場を失い低い土地に溜まる状況をいう。内水氾濫の場合、マンホールの蓋が突き上げられて開き、そ

の後、風呂の栓を抜いたような状態になることあるが、名古屋の水害の時、警戒のため巡回中だった消防団員が、そのマンホールに飲み込まれて亡くなってしまった。その他、川を見に行つて亡くなった人など、10名の犠牲者が出た。

今週末の9月3日、名古屋テレビ塔で、この10名の犠牲者の追悼イベントを、翌4日には、行政や企業や民間など様々なところが防災に関するブースを出店したり、防災体験コーナーを設けた防災フェスタを主催する。防災に強い人間になってほしいという願いを込めて、その案内チラシの配布と紹介をさせてもらった。もし時間があれば、ぜひ立ち寄ってほしい。この防災フェスタでは、7月の可児市の水害でまだ2名の方が行方不明であることも伝えながら、私達はこういった災害を忘れず、本当に災害と向き合っていかなければならない不安定な時代に入ったということ、多くの方々と一緒に考えたいと思っている。

私は、先程から「先生」と呼ばれているが先生でも何でもなく、現場経験が多い者としてここに呼ばれた。災害現場の話は、非常にきびしいものがあるが、その話を聞いてもらうことで、次の犠牲者を出ないようにするためにはどうしたらよいか、そういうことを少しでも考える時間にしていきたい。

今日は、地震と水害について、2つの話をする。まず、地震の話である。

よく言われている東海・東南海・南海地震であるが、これらの地震は瑞浪市には壊滅的影響を与えないため、そんなに警戒する必要はない。なぜなら、震源域が海の方であり、瑞浪までに距離があるからである。しかし、瑞浪市に被害が出るかどうかといえば、出るかもしれない。だから、全く無防備ではいけないということ覚えていてほしい。壊滅的被害にはならないが、震度5強から6弱は揺れるため、皆さんが生き残っていくためには対策をしておかなければならない。そして、この地震が来るか来ないかと言ったら、絶対来るということも覚えていてほしい。地震は、100年から150年の周期で繰り返して来っており、(この東海地方では)300年前に宝永の地震、150年前に安政の地震、そして昭和の地震が来ており、その次の地震が来ない訳がない。東海・東南海・南海地震は、日、一日とエネルギーを貯め続けていて、いずれ近い将来、ドーンとくる事を覚悟していなければならない。

宝永の地震は、東海地震・東南海地震・南海地震の3つの地震が、これを地震3兄弟と言っているが、これらが同時に起こり、安政の地震は、東海地震・東南海地震の2つの地震が同時に起き、その32時間後に南海地震が起きている。昭和の地震は、東海地震は気まぐれで休み、最初に東南海地震が来て、その2年後に南海地震が起きている。このように、地震の発生パターンは違うということを理解していただきたい。

さて、ここで問題である。大、中、小ときたら、次に来るのは何であろうか。多くの人は大と思うが、ひょっとしたら極小が来るかもしれない。このように自然のことははっきりわからないが、150年エネルギーを貯めている東海地震が、早く来るかも知れないと言われ続けている。ところが、まだ来ていない。静岡県では、30年前から東海地震が来ると言われており、静岡県出身の私の妻は、小学校の頃からしょっちゅう防災訓練をしていたという。しかし、あれから30年経ち、まだ来ない。今、妻は何を言うかと思えば、「もう、待ちくたび

れました。」と言っている。だが、日本の地震の権威である安藤先生は、今世紀前半には大きい地震が来ると言っておられる。安藤先生の「地震規模分布予想図」によると、瑞浪は、震度5強、一部地盤の弱いところで6弱である。地震には、0、1、2、3、4、5弱、5強、6弱、6強、7があり、7は、阪神大震災や中越地震の一部である。6強、6弱ぐらいまでは被害が出るが、5強までは、なんとか家の中の物が倒れるくらいで済むレベルである。そのギリギリのところに瑞浪市はある。そのため、多少、被害がでるとしても、皆さんは必ず生き残っていただき、被害の大きい被災地へ応援に行くぐらいの気持ちでいていただきたい。巨大地震が起きた場合、応援隊はどこに行くかといえば、被害のひどい地域である。極めて中途半端な被害が出る瑞浪には、応援は望めない。繰り返しになるが、瑞浪が無被害とは限らないが、皆さんがきちんと対策さえすれば、無事でいることができる。むしろ、頑張って、支援に行くことを目指していただきたい。

しかし、活断層の地震はわからない。活断層の地震は、阪神淡路震災以降、毎年のように起こっている。それは、日本がプレートに囲まれた地形に位置するからである。プレート境界線上では、海溝型地震が頻発する。今、日本で最も地震の危険度が高いと言われているのが、宮城県沖地震である。これは40年周期で起きており、そのため今、宮城県はものすごい勢いで対策を進めている。その他、巨大地震と言われる十勝沖地震、奥尻島の北海道南西沖地震、日本海中部沖地震は、みんな境界線上で起きている。大きな板をギュウと曲げていってパーンと割れるのが巨大地震だとすると、割れる瞬間にピリピリと出てくるささくれが活断層による地震である。今まさに、プレート運動が24時間、365日活動し続けいつもピリピリ来ており、地震は活発期に入った。

では、瑞浪に活断層があるかと言えば、まあまああるだろうということである。プレートの大陸移動説からすると日本は活断層だらけで、特に岐阜県は活断層のデパートで、危険ゾーンである。たまたま今、地震がないだけで、今後も、来るか来ないかわからない。しかし、来るとわかっている東海・東南海・南海地震の対策を活断層地震にも応用し、きちんと対応策を考えておくに越したことはない。私達は、親から子へ、子から孫へ、日本は地震大国であること、そして対応策の必要性をきちんと伝承していかなければならない。

愛知県は岐阜県と違って、東海・東南海・南海地震が直撃するため、非常に恐ろしいと言われている。どのくらい恐ろしいか、阪神大震災の直後の映像を見てもらいましょう。

～映像が流れる～ 見ていただいたように、様々な被害がある。では、私達はそういった被害に備えているだろうか。愛知県の場合、最近では防災の日が近いため、毎日のように中日新聞が地震の記事を載せており、アンケートでも、東海・東南海・南海地震に関心があるかという質問に、9割以上が関心を持っていると答えている。ところがこんなに関心があっても、備蓄食料を用意していない人が4割、無料の耐震診断を受けていない人が7割近く、自宅の家具の転倒防止をしていない人が5割以上、自主防災活動に参加したことがない人が7割もいる。

阪神淡路大震災では、家具や家屋等の転倒や破壊による圧迫死が8割以上であった。現場

で被災者から、とても耐えられないような話を数多く聴いたが、今日はこういう機会なので1つだけ紹介する。

小学校6年生の娘と両親の親子3人で川の字になって寝ていて、被災した家族の話である。早朝、突然、地震に襲われ、母親と娘は無事であったが、父親は、箆笥と少し傾いた家屋に足を挟まれ出られなくなってしまった。そこで母親と娘は、一生懸命父親を引っ張り出そうとするが、なかなか救出できない。そうこうしているうちに、近くで火が発生し、一刻の猶予もなくなってしまった。父親は、母親に、「台所の包丁で自分の足を切り落としてくれ」と頼むが、母親はそんなことはできず、無意識のうちに娘を抱えて外へ飛び出して行き、父親は、「助けてくれ」と叫びながら亡くなってしまった。生きたまま、焼死したのである。大変悲惨な話である。

しかし、大勢の犠牲者のそもそもの原因は、最初に言ったように、阪神大震災の場合、家具や家屋等の転倒や破壊による圧迫死が83.7%なのである。今申し上げたいのは、神戸の方々は、ふいうちで地震に遭遇した。皆さんも、地震は来ないと思っているかもしれない。だが、先程から言っているように岐阜県は活断層が多く、いつ地震があるかわからない。皆さんはそんなことをビクビクしているより、「家を丈夫にしていくこと」あるいは、「せめて寝ている部屋には家具を置かないこと」をしっかりとやらなければ、また同じことになってしまう。もし、明日、同じような災害があって、瑞浪の多くの人が同じような被害に遭ったとしたら、15年間何を学んできたんだと、被災地から怒られるような気がする。

多くのマスコミや色んな人達は、その瞬間だけを捉えて、「大変だ」、「災害だ」と言う。しかし、その後の避難所はこんな状態である。～映像照写～ あえて、中越地震の時の写真を見せるが、阪神路大震災の時と同じ状態である。阪神淡路大震災から中越地震まで10年あるが、何も変わっていない。こんなことにならないためにも、災害体験談と対策案を伝承していかなければならない。ここにいる地域のリーダーである皆さんが率先して、まずは、「寝室に家具を置かないこと」を地域ぐるみで今すぐ始めていけば、圧倒的に被害は激減するはずである。最愛の人を亡くした遺族の苦しみは永い年月続き、なかなか癒されないものである。ここに、5歳の娘さんを亡くしたお母さんが娘さんに宛てた手紙を紹介する。～手紙の朗読～ どうしたら、災害のために起こるこういう苦しみ・悲しみが無くなるのか、皆さんと一緒に考えたいと思う。今後はこんなことが無いよう、私達はしっかり備えをしていかなければならない。

一方、阪神大震災で、命を守った話もある。阪神大震災では、35,000人が生き埋めになったが、そのうち77%が地域住民によって無事救出され、23%が自衛隊等によって救出されたが、その半数以上が遺体だった。私達は119番通報をすると、全国平均7分で救急車や消防車が来てくれる安全安心な環境にいる。しかし、災害時はそうはいかない。そういう状況で頼りになるのは地域である。阪神大震災で命を守った3点セットと言われるのが「バール」「のこぎり」「ジャッキ」そして「スコップ」である。それを備えている地域と、そうでない地域とでは必ず差がでる。命を救うためには地域の防災力がいかに大事かということ、過

去の災害は、嫌と言うほど教えてくれている。中越地震も同様で、世帯の4分の1が高齢者や乳児などの避難困難者であったが、家族や地域の住民で助け合って避害を逃れたのである。

特定の集落では中山間地の孤立集落の問題があり、瑞浪市でも考えなければならない地域があるかもしれない。孤立集落は災害時に応援が必要となるが、孤立可能性のある集落が全国に58,000ある。これらの集落では、安全な避難施設の設置、非常電気の確保、非常時の物資の備蓄、非常時の情報手段の整備・確保、自主防災組織の編成などがほとんどされておらず、様々な課題がある。これは地域だけでは解決できず、行政と十分協議をし、できる限りの整備が必要である。しかし、これを行政に押し付けるだけではいけない。

これは中越地震の被災状況である。～現場映像の照写～ 中越地震では、家の倒壊、地盤の液状化現象、斜面崩壊、昔からある街道以外のほとんどの道路の崩壊などが起きた。先程、中山間地の問題のところで、行政にやってもらわなければならない対策の話をしたが、皆さんは、都会にはない「生きる知恵」と「地域コミュニティー力」を持っている。中越地震でも、地域の方々が、2日目には自分達で重機を持ち出し寸断されてしまった道路の補修工事にかかり、3日目夜には仮設道路を切り開くというすばらしい地域力を発揮した。だが、それには悲しい訳があり、小学校6年生の女の子が入浴中に被災し、2回目の余震で倒壊した家に潰されて亡くなってしまった。そのため一刻も早く医者に診てもらいたいという思いで住民が力を合わせ、道を切り開いたのである。また、ある集落では、区長さんが炊き出しに必要なものを指示しただけで、各自協力してスムーズに炊き出しをし、自分達で無事飢えをしのいだということである。すばらしいコミュニティー力、実行力である。阪神大震災は、全然違う。行政担当者に「おい、メシ、まだか。」と言った人がいるかと思えば、道具がなくて炊き出しができず悔しい思いをした人がいたり、給食室を借りて自分達で一生懸命炊き出しをした人もいる。都会は都会で、地域の事情により、できること・できないことがあるが、中山間地の方ができたことが多い。皆さんは、自主防災組織をしっかりと同時に、もともとある地域性を大事にしていきたい。もしそういうものが薄れかけてきたら、それを取り戻すための訓練なり対策が必要である。どこの地域に行っても1つとして同じ地域はない。皆さん方の地域にあった体制作りを是非お願いしたい。

次に豪雨の話をする。

これからは、豪雨対策がとても大変な作業になってくる。何故なら豪雨回数が非常に増加し、しょっちゅう豪雨があるからである。50ミリは滝のような雨、100ミリは100年に1度の雨と言われている。平成20年8月末の豪雨は、岡崎市で146ミリ降った。実は今日、野洲市から来たが、野洲市でもすごい雨量の雷雨があった。なぜこんな風になったかと言えば、地球温暖化のせいである。大型コンピューターの予測によると、今後2100年までの日本の夏の豪雨数は、2000年を境に増加傾向にあり、3倍～10倍になる。しかも、全く降らなかつたり、ものすごく降つたりの幅が激しくなると予想されている。こんな時代を私達は迎えていかなければならない。日本の川は、ほとんどが中小河川のため、雨が降り始めて堤防が決壊するまでの事態の進展が非常に早く、ゲリラ豪雨による被害が起きる可能性が非常

に高い。

5年前はアメリカに、日本をすっぽり覆うほどの台風が発生し町を水没させ、2年前は、ミャンマーに巨大サイクロンが発生し80万トン家がなぎ倒され、今年韓国では3日間で2,000ミリの雨が降り、集落を飲み込んだ。日本は年間で1700ミリの雨が降るが、今年7月、鹿児島県では2週間に1,200ミリの雨が降って、深層崩壊を起こした。地球温暖化は日本のみならず、全世界で異常気象をもたらしている。

ゲリラ豪雨に遭遇したとき、私達はそこにじっとしている方がいいか、避難所に避難したほうがいいか、各自、瞬時に判断しなくてはならない。過去の災害を検証すると、避難したほうが良かった場合もあるし、じっとしていたほうが良かった場合もあり、その時々でどうしたらいいのかが違う。そんなとき何が大事かという、情報を掴むことである。しかし、これは難しいことである。何故なら、行政が1軒1軒にそうした情報を出せないからである。わずかな職員で1軒1軒回るとは無理であり、それを行政に求めても出来ないことであって、行政の限界である。ならば、私達自身が災害に強くならなければならない。市長が出す避難勧告情報、国土交通省が出す河川水位情報、気象台と県が出す土砂災害警戒情報を認識し、情報を収集する努力をしなければならない。情報収集に当たっては停電したら使えないテレビだけに頼るのではなく、トランジスタラジオや充電パソコンを用意する、また、パソコンが苦手な人がいれば自主防災組織の中に情報班を作り、パソコンの出来る人に担当になってもらうなどして、情報の収集や伝達する努力を住民側もすることが大事である。そして、市長がタイミングよく避難勧告、避難準備情報などをだすはずであるから、その情報で避難すれば、絶対に段階的災害から命を守ることができる。

ところが、いつも避難勧告が適切に発令されるとは限らない。市長は苦渋の選択で避難勧告を発令するが、雨が予想と反して小康状態になって川が氾濫しなかったという事態もある。そういう時、市民から必ず出るのが「市長の判断が早すぎた」とか、もっとたちが悪いのは「工場をストップして損したがどうしてくれる」と言った声である。そんなことばかり言っているのでは、避難勧告が出しにくくなっている。「被害がなくて良かった」と思い合える地域になっていかなければ損をする。例外もあるが、早目に避難したほうがいいのである。

今日は色々話をさせてもらったが、人の話は、たいがい1年もすれば忘れるものである。忘れないために皆さんは、地域で1回は学習会などの場を設け、全員で話し合ってもらいたい。群馬県みなかみ町では地域の人達が、「過去の災害の先祖からの伝承」、「専門家による診断結果を盛り込んだ『土砂災害危険な個所マップ』の作成」、「行政に頼らず、地域の判断で危険な時は自主的に避難するルール決定」をして、いざという時に備えている。出来れば、これに「要援護者マップ」があれば、鬼に金棒である。しかし、これは、行政に情報を求めても個人情報保護法にひっかかるため絶対出してもらえず、作成が難しい。個人情報保護法を破る唯一の方法は、本人の了解を取ることである。そのためには、民生委員や地域の力によって本人を説得しなければならない。そうして情報を収集したら、要援護者を重症度によってランク分けするとよい。そうすることによって個人ごとに救援者の必要人数が把握できる。

こういう体制作りが究極の災害に強いコミュニティーに繋がる。もちろん、普段から声を掛け合っているような対策をしておくことが前提である。例えば、地域ぐるみでの家具転倒防止の実施、要援護者支援事業として車椅子移動の訓練、子ども達と一緒に歩いたり炊き出しの実施、防災運動会の実施などがある。防災運動会は、皆が協力しやすく、かなり盛り上がって、楽しんで参加してもらえる。

災害対応は行政だけでは限界があり、減災に向けた住民参加が必ず必要である。地域で、災害に対応できる人材を発掘・育成し、地域の防災力向上を図ることが重要である。そういうことを1からしていると、必ずキーパーソンが現れる。今日はキーパーソンの集まりである。皆さんが各地域で組織化をし、年間行事にしっかり組み入れていく。そして、担当者は毎年コロコロ変わるのではなく、3年なり5年なり地域にしっかり根づいて、持続できる体制作りをすることが大切である。

今日は、大変重要な機会を頂いた。今日の話が、皆さんの自主防災組織の活動に役立つことを願っている。

閉会 20:30